“*HAIKAIJURON BENHISHO*”
– a Commentary on “*HAIKAIJURON*” *2*

Yasuyuki Nakamori
Eri Nagata

Abstract

“*HAIKAIJURON*,” written by Shiko, who is known as a controversialist among Basho’s disciples, made a great contribution to the propagation of “Shofu Haikai” in the Edo period. Shiko and his disciples had been giving lectures on “*HAIKAIJURON*” all over Japan throughout that period in order to teach ordinary people Haikai.

However, “*HAIKAIJURON*” had been too difficult for us to understand and explicate for readers today. Moreover, we had only two explications of “*HAIKAIJURON*”—both published in Edo period (“*JURONIBENSHO*” and “*JURONHATSUMO*”)—from which to work with. Although we tried to explicate “*HAIKAIJURON*”, there had been too few sources related to “Mino-ha” (Shiko’s group), thus far.

In this paper, we are going to introduce and reprint the book called “*HAIKAIJURON BENHISHO*”. It is a transcript of a lecture on “HAIKAIJURON”. After analyzing this text, we found that all annotations were very close to Shiko’s original theory. As a result, we concluded that this work is very important in understanding “HAIKAIJURON” and the actual situation surrounding Shiko’s lectures. In other words, it might be consider another “*JURONIBENSHO*”. We are convinced that “*HAIKAIJURON BENHISHO*” has been of great use in understanding “*HAIKAIJURON*” easily.

今抄』に考よ。」[44]

○公私の二字　執筆の心得、公は表向、私は内証、執筆の本文にて明らか也。

音ン の急緩　清少納言が『枕草帋』、是を「枕の草紙」とよむ習也。牡丹を「ぼうたん」とよめり。是も詞をゆるめたる也。ちゞめたるは『大和物語』に茶盆を「ちやぼ」といへる類也。

○道徳の　道の論、徳の論によく「実」をほどく事を工夫して、法式の論に「虚」を補ふ事を工夫して見よ。我家の一道は三聖の如くならんとなり。

○竊（ヒソカニ〈ルビ・朱〉）に老彭　「虚実の虚」に居る所。

○春秋ノ〈朱〉嘆息モ〈朱〉楞迦ノ〈朱〉密法モ〈朱〉　孔子の褒貶も達磨二祖に伝ふる所も、ひとへに子供を」ゥ親のきびしく呵るが如く、本心の「実」に至らしめん為なり。

○万古不易　我家の俗談平話をさしていふ。

○変化　有虚居実、有実虚居也。

○数寄と不数寄とは〈朱〉　孔子の弟子さへ十人は十人に心が違ふ也。されば『十論』の大意を考え、俳諧の大法をひらき、天下の「人和」に遊べとなり。天理は道理の極らぬ処有。人理は道理の極め尽した処にあり。心はもと「虚」なるものと悟りて、今日の附合にはじつと五倫の法を行ふ、是五倫を使ふ也。それを「心は虚也」とばかり思ふてその通りにすれば、則狂乱人也。克」[45]己復礼、是我家の第一也。」ゥ

（注1）「也」に朱で「や」と上書。さらに右に「や」と添書してある。

（注2）本文「の大極」、朱で「の」にミセケチで「ハ」と訂正、「大極」にルビ「タイキョク」。「の一気」は朱。

（注3）「殸」の「ヒ」の上に朱で「弖」と上書。

※（下）では漢字一字の繰り返しには「々」を用いた。

（訂正）

（一）十頁上段最終行　若→君

貴重な資料の閲覧及び翻刻をご許可頂いた国立大学法人九州大学附属図書館、貴重な資料の閲覧をご許可頂いた大垣市立図書館、岐阜県図書館に厚く御礼申し上げます。また、資料閲覧に際しお世話になった野呂鎮子氏、ご教示頂いた長瀬とも氏に感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「支考俳論と美濃派伝書の俳諧史的展開の解明」（課題番号21520188）の成果の一部である。

○発句の余情　是は脇の韻字の事也。よく〳〵考ふべし。
○匂ひの花　ほ句の道理を花に匂はす也。「匂はす」とてことばに顕はすにあらず。心に含匂はす也。その日の」42挨拶か又は奉納なれば、奉納其日其言（会〈ミセケチ〉）の匂ひ也。
○一句一直　出る所の句、一度は直すべし。二度とは直さず、作者に返すなり。
○出合遠近　句遠なる人に付さす事なり。さもなきときは早く出たるを付さするなり。
○関雎（〈朱〉）に哀楽の頌　口伝なり。畢竟、「風諫」のたとへなり。
○平話の内の風雅　常の言葉に風雅をまじゆるなり。」ウ

伝曰
○理事の二　本文の道理を見よ。「何の為」と理を分け、新らしきものと事をわけていへりと也。
○五条の心得　宗匠　判者　執筆　亭主　連座
○日夜の変ず（に〈ミセケチ〉）　跡をとめざれといふ処で其理をもつ。此理をさばく故に。
○江戸にて会

宵闇はあらぶる神の宮遷し
北より萩の風そよぎたつ

前句の「宵闇」をうけ、伊勢威霊をもたせ、「北より萩」と」43余情をふくめ、二句にて月をもたせたり。又「月」の字なくてはとて

八月は旅おもしろき小ふくめん

と三句目に月並の月を出して設れし。夫を近年「宵闇」を「月」とこゝろへ作るもの、大きなる不調法なり。此格をよく味へ。「宵闇」は僊宮の時節をもたせ、「月」と仕立たり。猶更句はせたり。二句にて月をもたせ「八月」と「月」の字を断りたり。又月秋の時、月は三句目より先へ延ばさぬもの也。無拠時はこぼれ月といふもの有れども、夫は法有。ほ句、脇、第三、秋がつゞきて月なき時は、七句めに他の季の月をして、裏の月を略するなり。」ウ星月夜（為弁〈ルビ・朱〉）「ほし月夜」といふものは秋季になつて月にならず。星月夜の句が出たらば、七句目の月は花、他の季の月をすべし。

極伝授。

○ウフノ通　口伝　ヒロウ（イ・ク）　セハウ（イ・ク）　イキシクニ通
○フヒヘ通　ヲモフ（ヒ・ヘ）
○イキシク　アツイ（ウ・キ・ク）
○カキクは　竪　音通とい、
○イキシチは　横　連声といふ
○仮名は　口伝　其場のよき様に書也。その中に古実のかな、「うぐいす」を「うぐひす」と書、此類のもの大分有。五六ヶ条は『古

も、我家にはよくその好悪親疎をはなるゝを第一とす。
○長点の法　趣向の勝れたるにあり。」ウ
○圏点の格　句作の平等なる物に有。
○秀逸の印　中で至極附方の是か非か危うい処にあり。畢竟判者の心得が平等心を本として一軸にむかふ時、其一軸を前より奥まで読(ヨミ)て見て、「是がよい」「是はわるい」と、はや「好悪」が生ずる也。其生ずる好悪の句を捨て、何とも思はざる句を吟味して、次に「好」とおもひ、「悪」とおもふ句をかんで見れば、前の「好悪」がはらりととけて見ゆる也。秘蔵の事也。応変論の荒増なり。
○一道の点　本文にて埒明。
○附合の運び　さら〳〵としたる句なれども、三句のはこびよくは」40
○其癖に　「こうした事は得手じや」と人にいはるゝ所、是一箇に凝ったと言もの也。万方に弥倫(ミリン)する人とはいはれず。故にその得手をおし退て点をせねば、必其好む処に行よつて、後はその連中斗がてんしてたわいがなくなるなり。
○といへばかく　善言をいゝてもとかくいろ〳〵非書して、好む所に落すなり。
○自己の眼　こうした合点のいたものには俳かいの地を伝ふべしとなり。
○姿は別なり　連歌の情(ハ〈ミセケチ〉)を以て作る。俳かゐは姿を以て作る故に、言葉はたとへ連歌のことばたりとも。」ウ
○雅言のぬめり　やさしい言のやうにして、いやな言葉がある。「そもじ殿」「あむら」など、いふ類也。
○俗語のいやみ　詞が俗中の俗語なり。又心のぬめりといふものあり。

「古池や蛙飛びこむ」、是を「山吹や」と傍つたる所也。雅言のぬめり、俗語のいやみは大かたみゆる也。心の雅のぬめりはみへにくき物なり。又

麦粉喰ふそばにぐびつく鸚鵡哉

是心の俗のいやみなり。
○十国十色　国々の風義なり。

小枯木(カラキ)におもへば伊賀の庭竃　涼菟
金くるゝ小町が手より花のはる　其角」41
蓬莱にきかばや伊勢の初だより　翁

『為弁』に委し。
○仮名と真名との　「野飼の牛」に「尻馬」、打越にも許すなり。むかしは言にかゝり作るゆへ、嫌うたけれども、「野飼の牛」は姿にて、「尻馬」は馬の姿はなき也。外是に習へ。或は体用を見わけ、同じ手尓波、同じ留りの語路の出来ぬやうにするが執筆の心得。「松風」に「風呂敷」は構はぬながら、「ふろしき」と書がよし。
○竊に其事　宗匠によりて、一座の老人か貴人か人によりて差合をゆるし度おもへども、声高くいふ時は脇に対してゆるす事叶はぬ故に、低く宗匠に窺ふときは公私のさかいにあやまちなき也。」ウ
○指合去嫌　といふものはあながち四季を以て立たるに非らず。一巻の変化を知らしむる也。
○さて一順　本式に一順の出来る迄は宗匠は別座に居る。一順済て後、文台脇に出るもの也。式の訳は聞書にあり。
○奈良茶三石　是俗　『論語』精、是(シラケ〈ルビ・朱〉)雅なり。
○茶人の時分　茶人の喰ふ時分よりは、俳諧の食事は大事の物なり。

等の前句にかゝる一句立ぬ句を難ずべし。趣向のわるきは戻すべし。句作のあしきは直すべし。

○利屈のつまる句をいはゞ

さらりと晴る炉路のむら雨

宿札に仮名付したる医者なれや　其角

「いしやなれや」とつめたる故、理屈にて先が生ぜぬ也。是を翁の直しに」ゥ

宿札にかな付したるとはれ顔

となされた。是故に句が理屈にせまらず、先が出るなり。

『為弁』ニ　風雅実情うすし　杉風・去来

滑稽の談笑に遊ぶ　丈艸

こなしを好む　正秀・曲翠

なぐりを覚へ　許六

民間の俗談を訯ふ　東花坊

前にいふ四頭の衆は其一理を得て其二を知らず。孔子の四哲のごとし。　民間の俗談を訯ふは俳諧の地をよく調え、「虚」にして「実」、「実」にして「虚」を訯、只学ぶべくは此所也。

○四折の変化　所々に変化して同じやうに変化せぬやうに考べしと也。初折は「地」、二三の折より「半地」[38]半曲」、名残の表より「曲節」の尽し所也。

○宗匠より直す　人に好悪をつけず、ひいきをせぬやうにして

○一座の訯　『古今抄』などにも段に出たり。第一体用といふ物を能わけて、其上趣向と句作をわけ見るべき也。趣向には体有って、句作には用ばかりなりといふものを心得べき也。付られぬものは

打越を嫌、付らるゝものは二句去也。よく考みるべし。体用のわかち有、付けられぬ物といわゝ、「煙草盆」に「灰吹」の類なり。様々口伝。

○月花の訯　二季の「彼岸」「養父入」「出代」の類、昔しは「後」といふ字が入らねばならざりしを、今は秋に付れば」ゥ秋になり、春に附れば春に成る也。此類『古今抄』にも委細出る。一理万通すべし。

○例の一節　威儀の心と見るべし。大事の詞、道の為に解もあり。扨又人に聞かせて誉られふとてとくものもあり。さて我家の一門建立の一節ならば、俗談平話をよく訯て、心に会得して言語にわたつていはゞ

富士をいざ山の端にせんけふの月

と一節を傍が立たり。しかし他流の節とは違、良夜の月に望んで此名月に対する嶺は何国ぞとあまねく見て、三国に対するは不二ならではと「節」を立たり。

十夜とは先づ釈教に恋無常」[39]

只一句にて伯父も閉口

「唯一句」といふ処、我家の「節」なり。前句は連とも俳とも知れず、寺詣に女も参れば老人も参ると、たゞさら〳〵としたる句に、附句の伯父もとかく恋などこのむ序ながらと身立たり。「唯一句」といふ「句」の字に心を附て見よ。「釈教恋無常」といふ言便に「一句」と付たる所、心の「節」なり。か様の句はことの外附けにくし。下手すれば前句の噂になるなり。

○判者　世間にいふ点者也。我家にては判者といふ。三十二法あれど

法式論

○法式　口伝別記有。

「連歌新式」の起源より、「貞享式」に至。宗鑑、守武、貞徳までは式はなかりしとぞ。」ゥ

○其理は古も　いにしへの俳かいは、詞先斗ゆへに心におもひ入らざりしゆへ、或はつまり、あるひは延たる所あり。詞先に誤故、法式に狭められ、難義をする人多し。

○発句切字　古の連歌の宗匠達、初心の為に十八のきれ字を拵て、切字の遣ひ様を知らぬ人の為に立たるを、近来は古流にも他流にも是を宗匠も取用る也とぞ。「どふした故に『や』のじを遣ふぞ」と口合せず、古の定めにして居る也。我家には、字といふは法の名にして切レ也。口伝　発句のきれ字といふより、何の故まで口でん也。

○

さくらちる木下風は寒からで
空にしられぬ雪ぞふりける

○

四方から花咲入て鳰のうみ」36

言葉の艶たる所にて切る也。

○心をかへさねば　其事理を差別する所、「心の切」也。一大事の事、万事表斗を習へども、其義をかへさねば、役に立ぬ也。学て思はざる時は暗し。言中の意といふ事を知るが大事也。其是を是と思へども、行はれぬときがあり。又我はおもへども人のあしくいふあり。是を動かへて心をかへして、よく物の「始終」を了簡して「始終」を合す所をいふ。我心と人の心と和合する所をさして、返心の工夫といふ也。

○俳諧は平話　何の為ぞ。俗談平話を設て「人和」をあつかふ為に立たるといふ事をしらず。

○

天（為弁）永し地は門松の御代の春」ゥ

是は露川が句也。「天永し地は門松の稲荷山」といふ句を替て出されたり。十八の切字と言事、古式の法にて他流に専ら用る処也。我家の教は心の切字を用るなり。先師、『露川責』といふ書を露川に送られし時、「「天永く地は」とめされよ」と異見など有。「地は」と抱たる所に切字有。

○

桐の木にうづら鳴くなる塀の内

「桐の木や」とすれば桐の木のほ句なり。「桐の木に」、是にて「にまはし」とて切字になる也。「桐木に」といふた所でうづらの句に成る也。猶此句に難問有。「『もみの木』とも『松の木』ともいふべし」と。さにあらず。「桐の木」といふもので鶉の句也。田家の様がある也。「樅の木」等にてはとかく律院・禅林どもの場なり。是を以てほ句の心がけ料簡有べきと也。そこが姿也。」37

○宗匠の法　口伝別記。

○第一は附心の道理か　その座の頭たる人は、理にせまる句は先へ通らぬもの故、能々道理・理屈を考えよとなり。前句の外の趣向を出して内の情を結ぶならば、ほめよと也。前句の外のしゆかうをとりて噂の句にならば、難ずべしと也。「古き玄蕃の名を伝へ」

秋風（情）ぞ吹くしら川の関　　能因」33

又

都にはまだ青葉（姿）にて見しかども

紅葉ちりしく白川（姿）の関　　頼政

能因の歌は姿を後にせる也。情の歌也。頼政の歌は色立の句、是を「等類の歌」と皆人いへり。けれども姿情が分つて二つなり。大きに違ふ故、定家卿「等類にあらず」とて、撰集にも入給ふ也。

ちくま川春行水は清みにけり
きへて幾日の嶺のしら雪

水清し消て幾日のはるの雪

是は連歌の発句也。」ウ

今川了俊『落書露顕』と言書に「等類也」と難じたれども、歌は唯その情をのべ給ふに、発句は「水青し」と見るやら体の姿をばづしりと出したれば、等類に非ざる也。

情はうづむ。

○古事古語をとる　口伝別記に有。古事古語を用にしてとる也。同じ古事にても普く人の知って居ると、又人の知らぬ狭ひ古事あり。広い故事は夫をいれて仕立ても大事ない。せまい古事は其事を入ねども聞ゆるやうにせねばならぬ也。古詩・古歌も同じ事也。言葉をとらば情をとるな。情をとらば詞をとる事なかれ。情、詞ともにとらば盗人也。たとへば」34

夕されば野辺の秋風身にしみてうづら啼なる深草のさと

十六

桐の木に鶉なくなる堀の内

或人の曰、「是は杉の木にて同じ事也」といへり。杉の木か草にする時は別歌の心なり。「桐の木」といふので田荘の模様はつきりと自句になるなり。詞をとるといふ、是也。たとへば桜の歌ならば、紅葉か雪にとりて仕立るが意地也。能可考。

○隔句　句をへだゝて心の対する。

○錯綜　まはつてこゝろの対する。

○双関　彼と是とを取結んで、一つの道理でふたつをとりむすぶ。たとへば」ウ

から鮭も空也の痩も寒の内

○倒装　上にそれといはずして、下に道理を顕はすもの也。たとへば

秋の夜や山鳥の尾に是の人

○第一の発句には　別に委し。

○怨の一字　『論語』の訟は朱氏の注と先師の心とが違ふ。『為弁』に委し。

○蟋蟀の法　つまる所が「蟋蟀墻下に入る」といふ事を、七、八月より段々書立るやうなるもの

高砂の尾上の鹿の鳴ぬ日も
つもりはてたる松のしら雪

一字の事に序を永ふ付いふを、「蟋蟀の法」といふ。」35道理を永ふいゝつゞけて、一つにつむる所をいふ。

○虚実の二論は　心法にあり。

○理論　遊びの一字に眼をつけて、「虚実の変」を知る時は、理は第二義になるなり。然れば賊後の弓なり。

○例に無分別　是は平常「附合はどう」、「姿情はどう」と学び置た事ゆへ分別の座に居て、扨その場に向ふ時は。

○初念の趣向　初念に案じ附たる趣向が納らずば、二句作して捨るがよい。とんと捨て、外のしゆかうに仕かゆれば、前のも能なる也。胸中に言ものは、変化せねば詰るものなり。」31

○爰の変化　日比学び置た道理をとんと打忘れて、無念無相になるが変化なり。○発句道理に軽重あり。　○畢竟、名人のほ句にても上手の発句にても一理がなければ発句にならぬ也。その理の穏かなると強ひとの事也。名人のほ句はおだやかにして、上手の発句は理の強きなり。作に作が重るゆへなり。

○轂（ヤゴロ）（注3）をはやくは　是はいさゝかの事にて口伝の所なり。発句でも附句でも、ひよつと趣向の浮ぶ事有。又一向に出ぬ事も有。爰を我家には趣向のすつと出ても先づ出さぬ也。又一向に出ぬときには、よいかげんにさら〳〵とした句にても出す也。しかと無いとおもへば」ゥ出されぬものなり。併、出るとき出さぬ工夫があれば、出ぬときも出すに自由なり。

伝曰

○三鼎の喩　　「始中終」なり。　　○ものに「始中終」は　天地人の三才也。されどむかしは三鼎の如く、「始中終」の理、事を尽して今は「始終」の事をのべて、理の一体を中に含めり。是生々限りなき天地の道理にして、正風万代不易の血脉、爰に可味。

口伝面授

○始終の二つ　当流のはいかいなり。」32

○情なし　「始中終」を尽したる故に情なし。我家は「始終」をいゝて、ひとつを残す故に、淋しきもおかしきも余情にこめて優美を調ふ也。先づ発句を作って、余情が附くかつかぬかと考えてみるべし。「始中終」をいふ句は、何程しても余情なし。何が故に「始終」をいゝて「中」を残すぞ、是歌にては「余情」といゝ、俳諧にては「にほひ」といふ。あるひは詞を残し、或は心をのこす。不角が句に

麦粉くふ傍にぐびつく鸚鵡かな

是を案じてみよ。余情なし。口伝残すは理をいゝ、残す也。理をいゝ詰れば理屈になるなり。

○教誡の論　詩歌連俳は「文」也。「虚」也。「和」也。此三つの物理をいゝ尽しては「文」とは言はず「教」也。

口伝　「風雅」は「文」なり。「教誡」は「質」也。」ゥ

追手三千土用八専
宇治勢田の灸ばしをぞ引たりける

是はむかしの俳かいながら、動情動作の働き様なり。是姿が有故也。亦（マタ）姿のなき句

焼（三疋猿）　餅の二つともへに三つどもへ
雪おれ竹に笠は壱本

ひやうしは能附たれども、一句が立ぬ也。拍子には兎角姿を忘るゝ。なにと姿がたゝぬは古流の場なり。『為弁』に委し。

都をば霞とともに出しかど　情

なけれども、上手の手づま事にて上手の下手也。」ゥ「虚」はその題、「実」は趣向〇「蛙」は題、「古池」は趣向。「飛びこむ水の音」、句作なり。

実　虚　口伝
古池やかわづ飛こむ水のおと

○虚実の虚

○虚実の実　口伝別記有。

○附句　趣向の一体に「虚実」の像あり。姿が前句によつて別の姿が顕はる、、前句の内より外の姿が出るもの也。畢竟、ほ句は無心から「実」を生じ、附句は有心から生じて「虚」を生ず。」29されば、発句には真・行・草の三体より「曲節」がなければならず。題と趣向と句作、発句の句作は「実」に有。附句の句作は「虚」でなければ先に行ぬなり。

発句には、題と趣向と句作と三つ有。

附句には、趣向と句作と二つより外なき也。

是を合せて和歌一首の五義に起合する事有。

実情とは発句の「虚実の実」で、名人の場、手づまといふは「虚実の虚」で上手の場。

声かれて猿の歯白し峯の月　其角

「声かれて」と言所、「さるの歯白し」といふ所、畢竟が「かれて」といふ字に殊の外骨折、「峯の月」に淋しき姿をうつして何やらけだかふ言た所、手先に有。声のかれた猿」ゥの声は聞かる、とも、白い猿の歯がしつかりと見らる、ものでない。此「白し」といふが発句の姿の「虚」なり。「声かれて猿のは」と切って、「峯の月」とも言べけれども、「歯白し」とい、かけたもの故、おほく詞先になって、俳諧体なし。されども其時迄は其角、翁の血脈したる故、いまだ本心うせず居るゆへに、「声かれて」と聞た所も有。「峯の月」と見た所も有けれども、元本心を失ふたる故に「猿の歯白し」と詞先に落たり。是皆「虚実の虚」から起る。

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店　翁

眼前の浮んだ所の冬の店に、塩鯛の歯ぐきをむき出したる処寒しと、「虚」は一字もなし。「歯ぐきも寒し」と言所にて我家の句作はあり。此下を上手の句ならば梅の花とも、何」30とも言べきを、「魚の店」と置せ給ふが、則蕉門の血脈なり。眼前の実景に遊ぶ。是をよく〳〵工夫せよ。

眼前実景　口伝　発句を作るに、かざるほど「実」を失ふて、「虚」になる。飾らねば「虚実の実」になり、かざれば「虚実の虚」になつて、上手の場になりて秀逸はなき也。「蛙飛び込」一作〇「歯ぐきも寒し」一作、是にて能々合点して、兎角一作〳〵にして仕立べし。猶も花といへば題、「虚」、白何々とすれば「実」。平生にほ句の像は天地自然の道理は目の前にあれども、見付ぬ也。此故に昼夜常の時に心愚常住の観に工夫すべし。無常の急に分別を砕きて居るべし。『太平記』の為明卿、三国志の魏の曹子達が如きも、平生心がけ有故」ゥに、其場に秀逸が出来る也。発句一つ仕立るも、兎角平生に能姿を心観じて居れば、秀逸が顕はる、もの也。されば社四条の涼みをみたものは、子供でも覚えて居る。是心に観じて居るゆへなり。扨森羅萬象を観ずるときは、天地一体に成なり。

心にてはすくむなり。離附をまじへよと也。
○程を知らざらむ　よきほど〲があるもの也。夫を知らずして一句〲に情を入るれば、能ひ事尽しならん。
○迯句　会釈の内、同体別名なり。」ウ
○親疎は附所　「ひだるい」に「ものくふ」事也。畢竟、「離付」のこと也。○五体○離々附はおもし。○離附は軽し。此はこびを覚ゆべし。発句より揚句まで此体あれども、重きと軽き故、内外等にてさばき行べし。口伝也。
○大名なれど　「商人」と趣向を附、「畏る」と句作をする也。然るを他流は「畏る」といふ情から案じて作る故、同じ句作にても、心の案方の先手・後手にて他流になる也。
○向ひ付　自他の差別をもつてわかる。其句と〲道理を立て付る也。大名に老僧を向はせ、薄着好に麦飯とこなしたり。向附といへる時は、ひやう〲とつゞまつたる時附る也。向ひ付は自他の差別なり。

大小さして杖ついて来る」27
女房さへ去ってのけたき世の中に

○色立　「赤い」といふに「夕ぐれ」とも、文に互照といへる事也。
○拍子　是は伝の所に委し。先づ宗因流にていはゞ

焼餅の二つ巴や三つどもへ
雪折れ竹に傘は壱本

是らは拍子といへども一句不立して姿がなき也。『為弁』に委し。
○起情　三句も五句も景情をのべて行過たるとき仕立る也。仕様を別伝に有。

○走とは　勢の所
○馨とは　声の余情、　『葛の松原』に委し。」ウ
○此方より彼方　前句を考へ別の趣向を立て、前句の内の情を結べども、向附といふものは別に此方にしゆかうを立て、向ふなり。いはゞ「背く」と「合」との違なり。
○向ふ附は縮む時　景情などにてすら〲と来たる時、句を附ちゞむるなり。
○発句の（ハ）大極（タイキョク）（注2）の一気　月・雪・花・郭公にむかふて一つの趣向を交しへて、其月・雪・花・ほとゝぎすの無念無相より感動して生ずる物也。「虚」に起って道理の極た処が「実」にとゞまる也。「虚」は心、「実」は詞也。いはゞ花雪といへば「実」になる也。名人は海眼にみた感概をいゝ、初心は見た所をさらりといふによって上手の句

からかさの若葉に啼や雨の鹿　　支考」28
鴬や餅に糞する掾の先

かやうに眼海をいふ也。他流は此句に色々の説を儲け、「餅は世かい国土」などゝ六かしくいへども、さにあらず。迷ふことなかれ。　○発句の信といふ事が大事なり。たとへば桜のほ句をするに、先及ばぬまでも眼をふさいで桜の時節、場を得と見なし、「扨此さくらは山の桜か川のさくらか」と道理を後に附けて句作る也。桜斗にあらず。四季題いづれも同前也。「唯仏にむかふて讃歎し奉る如くせよ」と歌のよみ方に教へ有が如く、其題のものを得とみて、其後情にかゝるがよし。竪題には強き詞を用ひ、横題には艶言を用ひて句作る。或は、唐の詞歌のきれ端し等用ひせぬでは

『為弁』に委し。我家の大事は此句作にあり。句作といふものは、二句と二句の間を行もの也。女の針の縫目を行がごとく、外の姿と内の情と合体して行也。

句作は前句の内の情を尋て、

趣向は前句の外の姿を案ずべし。

古しへは其事にその事を付る。今はその事に其理を付るなり。

○一句の作意を　いづれの歌とても一首の内上の句、下の句をわけて、上の句が名句、下の句がおとりだとわけてほめそしりする事はなき也。しかるにそのはいかゐは附句はかまはず、一句〳〵と仕立るはこゝろ得がたきなり。」ウ

作者は其心ならねど　前句の作者が其心とはいわねども、その心を此方からさぐつて言便にこゝろを配り付れば。

○一分の趣向はなし　前句の外の姿を立る、是附合の一分の趣向也。発句にも在て、譬へば桜の題に立て、其場か、其人か、其時分か、其時節かと、八体を考えて普く見尽して、扨、趣向を見立て句作る也。是を一分の趣向といふ。然るを、古集にかゝり彼是する故に、自分のしゆかうはなく、人の趣向を盗（ヌス）むなり。題を得るや否、題の景色を得とかんがへ、趣向を案じ出して、其上に情を起し案ずべし。古集にかゝり、二字三字づゝ」25切込んでは一分の趣向にあらず、俳諧の実にあらず。

○己が按排　ない処には処を求て、珍らしき事を言たがる也。一分の趣向は、有所に無い所の人の気の付ぬ事を案ずる也。一分の趣向と按排とは、似て非なるもの也。是は口伝事也。あんばいは情なり。趣向をつけずして、按排にどうかこうかと案ずる故に、前句の情を手まへの情が附く也。先按排せずして姿を案じて、其後に按排する也。句作の情也。あんばいを附ぬにはあらず。前にすると後にするとなり。我胸の理を附けず、前句の胸の理を附る也。夫はどうして附るならば、前句の姿を先に見て、そうして前句の情を案ずる也。畢竟、道理をつめ〳〵行時は、」ウ無分別の所なれども、此理を能認て無分別の所に入るなり。

　　袂に顔を入れて囁（言便）く

　奉公に大名居りは嘘（言便）そふな

前句に奉公人はみへねども、かつぎに顔を入れて囁くものを人置の婆々と見て、奉公人と趣向を出したり。前句の外の姿なり。「大名居り」は、此句作なり。

　　振袖に結ぶ清水を気遣ひて

「とかくかり着どもしたるものにて、振袖のぬるゝを気遣ふは何ものぞ」と考て、「とかく舞子共にて有ふ」と前句の外の姿に趣向の眼を付け見定めて

　　世は逆さまに母親を供」26

趣向を定るに舞子と見て、「舞子」といはずともくるしからず。舞子の所作の道理をのべて仕たり。百句も千句も是にならへ、返す〳〵も己が按排を後にして、一字に手尓波の別、如此が有心体也とぞ。

○一字一涙　句を作るに一字づゝに情を出すを、一字一涙といふなり。

○有心といふものは、一字一涙に気をもむ也。百句が百句まで有

梅の花夫ともみへず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば
「久かたの天」斗親句のつゞきにて、余はみな疎句の続かず。」22

○全ク附　有心体なり。

○有心（ウシン）附　歌にも有心体有けれども、少し違ふ也。有心といへば、無心に対する様なれども、さに非ず。此有心とは細かなるといふ事にて、残る所もなくこまかに付事也。

暁の夢に行灯の火をとぼし
さう泣ふなら嫁々が子でない

是前句の姿情をよく見尽して細かに附たる也。此付るといふ事知らねば、付ぬ事知らぬ也。故に能く附る事を先に習ふべし。

○会釈（アシライ）　此会釈と有心との味ひを会得（エトク）すれば、十五体は済なり。離附のはじめ也。」ウ

今はやるひとへ羽織を着つれ立
奉行の鎗に（趣向なり）誰も隠るゝ（前句の内の情也）

なを別録に委し。

○迯句（ニゲク）　あしらいの内也。併、ちとかるいもの。あしらいは少し離れ、迯大く離るゝなり。

○此三に変化すべし　此三つをよく設ば、十五体は心の侭に行るゝなり。

○俳諧の案方　「附句に向ふ時、観念　○そこに附られぬものを先に案じて其後、附く物を案じよ」と、先師のおしえ也。初念のおもひ離れずしてあやまつ故也。」23

○趣向定　前句の外の趣向をとりて定る也。執中の意なり。

浅茅が宿の貧に絵すだれ
曲　藪入の子に（趣向）大名の（曲）萩咲て（句作）
地　藪いりの（趣向）馳走に門の萩さいて（句作）
節　大名の子に隣から萩咲て

趣向の「伊達」と「萩」と互照の所節也。

たとへば、他流（へハリガミ）ならば「絵簾」といふに、「涼しかろふ」など、情に入て案ずれども、此方の流にては、「庄屋が隠居る」と前句の外の姿を見定め、趣向に仕立る也。前句の外の情を句作に結ぶ事を前句の用といふ。是、他流也。

つくばふて能いかげんなる窓もなし
跡から立てとりまはせども」ウ

是、前句の情に情を附る也。一句を立我家にては

寐臥は舩で楽に召さるゝ
国替えの殿に猫まで附まとひ

「舩」といふものに「国替」、趣向也。「殿に猫まで」、是、句作也。「舩でめさるゝ」の情を結んだは、「何事ぞ殿」とうけたり。「召るゝ」といふ所を女中も乗て居ると見定、夫に猫までと句作したる処は前句の用也。か様に用るなり。

咲花に獅子のさゝらを摺ならし
角前髪のにくいいも面ヲ
お手そへらるゝ綾の裁もの
内証の事も（趣向）使にみせて（句作）やり」24

伝曰

○虚実の問ハ中立なり。和也。「諷諫」の一節を伝ふて行処也。

○貴を以て人に下る　仲由問、孔子答、「よろこぶべき時は悦び、悲しむべき時はかなしむ」、是天理也。

○聖人の実語　「実」とは能其「実」を以、万法をたもつ。其「実」に「実」が重るがいなや、迷ひとも成り、愚人ともなる也。「実」といふ物は黄金のやうなる物なれども、ためて置くと欲が出来、あしく成也。とかく草鞋・杖の如く、暫くも留めず、天地と通貫して置が聖」20人の道、「実」の行ひなり。愚人の「実」は心にとむる也。

○我門〈朱〉ノ口伝〈朱〉ハ「以レ貴人に下る」四字也。『廿五ヶ条』に「一向宗」（念仏往生伝）又「獲麟の伝」二通り有といふ事、愚禿の二字、翁も信心ありしと也。横起の大乗を俗中に交り給ひて、中品以下を大乗に訤給ふ事、ひとへに翁の雅を下俗にまじへ給ふと同じ事也。○又曰、我家の教は俗談平話を以て導んとす。されば法然上人・親鸞上人に囁て、一宗を開き給ふ処、俗中の出家なり。出家は世を離るゝものなるに、是は信心不二の場に居て、俗中を訤、儒仏をさしはさんで今日の俗を訤給ふは、我家の俗談平話と同じ一体のもの也といへり。五倫のもと、虚なるものと心得て実を行ふ所、則親鸞聖人の一宗を立給ふと同じ」ゥ事なり。此故に、「貴を以人に下る」といふも玄々妙々の理を持ながら、聊の所を行ひ、詩歌連にこゝろをひとつにして、姿の低ひ所に居るなり。返すく\も「実を行ふ」とは「実」をとめて置には非ず。「実」を働する也。『廿五ヶ条』に曰、「姿は詩歌連俳に知て、心は向上の一路に遊ぶべし」。

○言行のたがひ　俳諧を意に行ひ、口に行ふ迄にて、身に行はぬは違ふ也。 十

○巽与の言　『論語』の語なり。

○変化論

変化は不定世界の名、不定といへる事也。終には」21変化といへるは凡人の手に及び斗り知る事にあらず。冬の甚雷、夏の風雪などの如き類なり。

○不定を訤　変化を知って知るとは、其変はどうした故に変ずると知るにはあらず。其変化に驚かぬ也。「変はある筈」と「虚」に居る故に、世界皆と知る也。非なる時は恨みず。「実」に居ては変化に驚く也。故に世情が化につかはるゝ也。「虚」なれば五倫の変は常と見る故に化を使ふなり。不常を常とみるが第一也。

○古今変　宗祇、守武が類。

○一巻の変　八体の附方の変也。発句より揚句まで一巻の変なり。

○始中終　始終　風雅の実、」ゥ是は伝の所に弁あり。

○附ざるも変　俳諧の能く附と付かざるとは、歌の疎句親句の如し。

親句とは

立わかれ稲葉の山の峯におふる松としきかば（是迄親）今かへりこん（此続き疎）

「立別れいね」と続、「山峯」とつゞき、「生る松」と段々語路つゞきて、「としきかば今かへり」とはつゞかず。是を疎句の体といへり。又

いふ事を言外にふくみて書けり。武家・僧又は発明の人は、月雪の語を口にいへども、言行」ゥ等しからぬといふ事をいへり。町人・百姓の時節に合ふて、心安く食をも喰へば及びもせぬ。「うば玉の」「久かたの」なんといへる雲のうへの詞をつかひ、不相応のことをなすことを憤って書けり。畢竟、言中に詩歌連をそしれり。

○薪に花　書面にて其さま賤しといへる斗にて書れたり。『古今集』にては少し意が違ふ也。

○中品以下　口伝　『為弁』ニ「俗談平話を知る為」と「さのみ道の軽」云々。○此時迄は　先師へ『廿五ヶ条』は伝はらぬとき也。口先でいへば軽けれども、此なんでもない処に我家の大事有。我俳諧も下学して上達す。中品以下とて下々斗に非ず。中品已下のことを上に」18知らしむる事也。畢竟「中に居る」といふ事故に、口伝といへり。

○翁の御詞を其時迄はしかと合点ゆかずして御坐在しに、然所去来より『廿五ヶ条』を伝授の時、最初に「俳諧は何の為ぞや、俗談平話を正さんが為也」と有しに依て、はじめて驚給ふとなり。

○洛陽は風士のつや(注1)　談々などは近年の事、翁の御時代よりもとかくくにや〳〵として、言葉を飾りしと也。

○作意に作意　自他用意に入る事也。『為弁』に委し。

　白雲に鳥の寒さよ飛ぶは鳫

無名の鳥の見えぬやうに有処を、詠やりたれば、遠く鳫が飛たて鳫今はつきりとみへたる也。無名の鳥に又「鳫」、是にては作が尽るといふもの也。是迄は我家も稀」ゥにゆるすけれども、此上て(ママ)は他流になるなり。

　しら雲に鳥の遠さよ　是にて作は調ふなり。此上にては雁の句すらりとする事也。作に作の重る。

　十六夜や龍眼肉のから衣

是もいざよひといふものは、名月の影にて龍眼肉の売のやうなるものと、是にて涼なり。「衣」といへる所にて、作に作が重るものなり。又三作を重る句

　幟たつ長者の夢や黒牡丹

○纔に雅俗のさかい　此「纔」の字大事なり。然らば俗談平話は、「ようござつた」「煙竹呑(マ)しやれ」といふが俳諧か、さに非ず。「纔」に雅俗の心におもふ所を口(クチ)に和らげ出す也とは、悪いといふものを「憎い」といへば、あん」19まり也。其悪いを諷して含めて出す時こそ、誠に心根迄恐る丶也。面白いを「おもしろい」といはゞ、言尽る也。諷して含めて出す時こそ、誠に心根迄面白い事の深きしるしなり。去迚、俗中の俗といふ事あり。茶碗を木綿帆の類、是は言はぬ事也。此類いくらも考て句作すべからず。畢竟、俗中の中に雅俗をわけて、聊の言語に俗談をいふ時、風雅のにおひを付けて行なり。『万葉集』などは人の心厚し。故に其心の如くすら〳〵といへり。是に風雅のいさ丶なる事を作る也。

○氷こんにやくや　国々に用る珍ら敷詞を聞て、句には我家にも用意とも此書面にては体に用るところを笑ふて書けり。」ゥ

○媚て能時は　一句媚言を嫌へども、又集等には一　二句も作する事もあれども、地を平話にして用る也。

背くこと有。三句のはこびわるき時は、右のごとく打崩す也。心をうけて附る事も有。前句の外の姿をもつて付る也。此弁は能々可尋なり。

　障子の外に夕日ちらつく
　罫どのはどれぞと老の目を拭ひ

兎角前句に化せられず、前句を化する了簡よし。前句」ゥの外の姿をとり、附句に繋ぎ行時は、化られず、前句の内の姿を附るときは、化らるゝ也。猶可尋。

　古村は古き玄蕃の名を伝へ
　木履はかせぬ雨の夕ぐれ

是『ひさご集』に出る所、先師、翁へ尋給ふに、翁驚給ひて、「我があやまち」とのたまふ。是眼前の内のものを趣向に附たり。引のけた時は一句が立ぬ也。前句の言外になきものを付るとは

　椿の色を奪ふはり物
　出がはりの炉路へ木履を叩られて

「椿」の「張もの」に「出代」の「木履」、言外には姿なき也。附かた克々可考也。」16

○知と不レ知　言語ばかりに非ず。『為弁』に委し。

○馬に大名　「馬」に「大名」を附け、「車」に「公家」を思ふとも、其趣向によつて古からず。前句の内から出すと、外から出すとの違ひなり。上手と下手との違いなり。

○媚たる人　「こび」とは高遠也。「さび」とは平生なり。

八

伝曰

○論者『一字録』獅子門の秘書なり。

○阿翁　翁を尊とみていへり。

○鎖詞の文　よく幾つも言かさねて連続する言葉也。

○互照の文格　春に柳　椿にはりもの　蛍に星のたぐひ、互に照らし合ふもの也。」ゥ

○字門対類　山川　林木　花と雪　此類なり。

○長短に叶　詞つきの長いと短かいとなり。

○四六の文法　四字と六字　対する也。

○俳諧諷詞　少し歌書を心得たるものは歌書の前書の如く似せ、経書をこゝろ得たる人は長引ンに、にへそこないになる也。唯、俗談平話の内に姿をもとめて、文法は定て定まらざるべし。兎角読出して、四六も五七も口ざはりの能が法也。余り長くて息を継かね、又は対句に拍子過、「花に鳴○鳥に起」等とする事わるし。『続猿蓑』の「今宵の賦」を手本とすべし。

○聞人感涙　虚を以て実をほどく、内に信をつゝむかたちなり。」17

○儒仏ノ歎呵（タンカ）　儒仏の歎呵のやうに、さびしくはなけれども、漆風呂のごとく「諷諌」するなり。

言行論

前段の修行地の趣也。ひとつにしても同じけれどもはつきりとせず、我家に「言行ひとし」といへるによつて此論を立たり。

○中品以上　中品以上と書出したるは、俳諧の中品以下をたのしめと

くみて、一日の内にも得とくする処、則十年の功の人なり。
○其場に俳諧「手前のはいかいの得たるや、得ざるや」と、先生方の句と我句と自己に合せ見て、考て俳諧の平生にもどる所なり。
○峠の松　峠から跡へ戻れば、松風の涼しく、野山の風姿より大工の宵寐まで気をつけよ。耳に聞く所は少しもない、只眼前の実景なり。○峠から帰らぬを愚人とい丶、帰るを聖人といふ。禅法などに「帰家穏坐」も此事也。戻るもいや、漂ふもいやにて脇に退いて寄言、惓語を捺てゐるを媚人とて、我家にては甚嫌也。故に我家には、「曲節地」三段に三人をわけて立」ゥたり。然るに、此座に並居る衆中も予も人も、大かたに峠に漂ふもの也。何とぞ申合せてそろ〳〵下り度もの也。言語の詉、戻り様、『為弁』に出たり。

寺まいりかと関もとがめず

口伝曰、趣向は先に案ずべし。句作の言語は跡に案べし。

此「関も咎めず」といへるに、眼がつゐて其先〳〵と案じ、いづれ太平の時なればと鎌倉を案じ、秀衡が館をおもひ、先へ〳〵と行也。然ときは「とがめず」といへる前句の理に呑れて覆はれる故に、附句が死るなり。どうしてお丶われるぞなれば、跡を返りみぬ故に、覆はれるなり。
同じ事ながら、

中間に巴が母を送らせて」14

「関も咎めず」と、泰平の世の関を爰にては乱世にして附たる故に、一句の情が起る故に、此句は活て来る。前句の一句に太平の情を、又太平の鎌倉にて付れば、行過る也。乱世にかへりてする時は、死活の体明らかなり。しかし「巴が母を送らせて」、是は「曲」の附合也。常にはせぬ事也。「平生地」にあらず。打越がその外むつかしき所にてする也。又、「平生地」

朝の間は柴附馬にこみ合ふて

口伝曰、「柴附馬」、趣向の姿也。「こみ合ふて」といへるが関脇の言便、句作の情なり。　是十年の修行地に戻りたる所也。平常学んで遊ぶべき処は、此場に居る也。仕安き処にて仕にくき也。畢竟、此場は人の知らぬ事、我心に尋て、」ゥ「峠に居るか、下るか」と心にて尋てみて、よく其はゐかいに梺にもどるなり。

夷らにかつけもまぜて高鼾
（為弁）五寸の胸に世かい一のみ　（尾張）露川

前句の奇言に驚て付る故に、其情に落入故に、前句の噂にもどつて「五寸の胸」ゆへに附句がこなさる丶也。我家にては附句にて前句をこなすなり。

損しても飛商ひにこりぬやら

か様に附る時は、前句をこなすなり。此句に限らず「青々と敷畳何々」といへば、最早上〻下着つ丶、魏としたると附也。是其前句に呑る丶がゆへ也。是を「糞替が何々」となど丶と附る時は、前句をこなす也。併此返り極」15まりはせぬ也。前句の道理をうけてする事もあれ共、畢竟眼をもつて句作をせよと也。よく〳〵考てみよ。

夷等に脚気もまぜて高鼾
是は能々案ずれば耳にきく情也。噂なり。
損しても飛商ひにこりぬやら
これは眼前也。姿也。併前句をこなす〳〵と心得ては、有心体に

七

○か、るゐせ言　五倫の道に随ふべきに、「曲節」斗のゐせ言のみい、たらんに、俳諧はさることながら、今日の放埒人といわるべしとなり。

伝曰」11

此段は、俳諧定りたる花の本家もなく、おのが様々に好む人の行過る事を欲たる段也。

○道の虚実　虚実に拘はらざる所は、平生心にして是「地」なり。『論語』の教の穏かなる処をいふ。○是は「虚に居て実を行ふ」と構えて居るに非ず。虚実にか、はらず居て、時に応じて行ふ也。

○一節のちからを添たる　『論語』の穏かなるさへ、五七章の節を添えたり。平生心に虚実の一節をそへたり。（クハヘタリ）

○双関の文法　口伝別記。

修行地」ゥ

○曠野駒　行過る所をたとへていへり。

○こなぎ

○和漢の人情　若き人々の行ふ方を書けり。

○発句の切字　口伝別記。

○『史記』の俳諧　正風蕉門のはいかいにはあらで。

○差合はかくの如し　さし合とは、てにをはの意味なり。

○去きらひは　造物の忌也。

六

○其故を学　是を他流にき、違へて、正門にいへる「その故」といふは、発句はどうした故、第三のて留〆は何が」12故と心得るが、「其故」を学べといへる事なりとおしへて、「秘伝なり」とて銀をとる也。大きなる違なり。此方の「その故」は、『十論』の心をいふ。五倫の立やうにても、始終を心得、喜怒哀楽の起るにも、是は何ゆへ起つたと顧る。畢竟我身をかへりみる処、顧は理で行ふ処、処は事なり。「此故」といへるは、「理」の字に当る『十論』壱部の大事也。其師に尋るとも、師も心のごとくはいはれぬ。弁に尽されぬ也。爰を能知て、心に思ふて尋た詞を心にうけて、理を考て見て行ふときは、我ものになる也。

○常の夜噺し　常の夜咄しは「地」也。是は平常の挨拶なり。「曲節」は段々替つた咄しともする也。他流の句は、平生の言語にあらで、夜咄しの夜言なり。」ゥ

○二十年工夫　如此ならば、廿年工夫のはいかゐを飛越えて、上手にならんこと也。

○老俳　此内には、俳諧を学び出る処の老若のにほひも有べきと也。併、先づ書面は人の老若なり。

○どちらも下手は下手なり　他門の俳をいへり。老は峰に居て媚て居り、若は麓に居て訳しらぬもの也。しかし道を進む者は嶺に居る。老俳は随分打崩し、麓の若俳は随分そだて、能所斗を引抜てす、め〳〵するが、勧善懲悪なり。老俳の媚たる処を憎み、若俳の得たる所を褒そだつるがよし。

○十年の功　十露盤の一　二　十年の功にもあらず。「学て」とは、正風の手筋を能名師に学て、また覚」13へずとも、其正風を能心に

面白く言なし給へど、句作工に入候也。夫故はじめはおもしろけれども、次第にさめ候」とて、其向ふの信切に束帯して道を貴み給ふ所を感じて、泪を流し給ふとぞ。俳も又斯の如く。とかく工みに工の重らぬ所を能々可心懸となり。

○擬（時宜）　誘（引いざないてわくる所）　弾（しかる事）　陶（よくその理をわくる事）

畢竟、「虚実の虚実」の拵様に行る丶也。元より曲節地の次第にも可味。

○節のなからんも　いつも翁の教給ふは、只「地」斗にて「曲」はいはぬものと心得、ぬら〳〵として何事もなき句を」9作るものも有ゆへに、是をいましめて。

○風言　口伝別記。

○節は家々　家々の風体なり。

○雅俗　俗談平話のうちに「雅」と「俗」とが有也。「肥て暑し」は「俗」、「痩て涼し」は「雅」也。○「曲節」弁じて曰、平生「曲節」斗に居る時は、晴がましき時も同じ事をいふより外なし。たとへば人、常に破れたる衣装を着ても、正月節句の節々には新らしく洗ひ衣にても着るが常の礼也。夫を常に有所の物を着崩しては衣晴なんぞあらんや。他流のはいかゐは如此「曲節」の内より正月もうたへば、節句も勤る故に、常の時も晴の時も同じ事也。いはゞ竹のふしの梢より根まで節ばかりにて、よの無きが如くならん。」ゥ我家の俳かいは、常は有の儘の衣を着て、平生の「地」に遊び、すは（ママ）正月節句といへばたしなみの晴衣の「曲節」を着る故に、珍らしく聞えて「曲節」が分る也。故に詞の古きをいとはず、一字の転倒にて其中から「曲」と「節」とが顕はる丶也。此故に「地」に居て「曲節」をつかふ也。他流は一句を残らず「曲節」といふゆへに、かれにつかはる丶也。○たとへば喜怒哀楽の起るとき、平生心が有故に世のならはしと思ふ故に、喜怒哀楽の起れ（ハリガミ）ども、心の自在をもつて仕ふ也。他流は平生心がなき故に、喜怒哀楽がおこれば是に引まはされて使はる丶也。是他流の俳諧のごとし。

○さま〳〵の撰集　撰集の晴の場にて世間の」10人に対すれば、随分「曲節」を尽す也。平生「地」をいふは撰集に「曲節」をいはん為也。夫をひろい集めてするゆへに行過る也。行過た末は他流になる也。『為弁』に撰集の事に付て難陳有。

○和説　○馬に心経　畢竟不得心の俳諧といふ事。

○六芸の「節」あらんも夫を癖　六芸、是は撰集など也。其おもしろき所は癖なり。その癖を学ばゞ、癖になるなり。○我は見へず、人がみるもの也。癖に善悪あり。常の詞にも能き癖、悪ひくせといへり。俳諧にもある也。我癖を知らんと思はゞ、人の誉る所をみるべし。たとへば句を作るに「面白」とほめるは常の詞なり。夫を「何の故におもしろい」と」ゥいふところ也。誉る所、そしる所、癖といふ也。是秘伝也。

○節供正月　平生に居て四季の節々に顕はる丶、是「地」より出る「曲節」なり。

○高低　「地」といふ物にも高低あり。是を知つて自在にするなり。俳諧にては雅俗の高低あり。○我家の俳かいは、口にいふ事も行ふこともなす事も、皆平生にかなふやうに作る也。言行ひとしきなり。

俳諧地

是は我家の一大事也。

○曲節地　三体ともに趣向にはなく、句作にあるなり。此地をよく調はざるときは、「曲節」不可然、「曲節」は撰集などの節場によつて出すべき也。月次、或は座俳諧ともには専ら此地に然るべき也。百首の歌の読方にも曲をよむ歌は十二、三首にて、余は皆地をよむ。地は人間の平常なり。伊勢が連が集、出代りの句、『為弁』に委し。眼前の実景を宗とす。是我家の教方なり。

　椿の色を奪ふはりもの
地
出代りの炉地へ木履をしかられて

「奪」といふに「呵られて」といふが言便なり。歌にいへる余情なり。」7又句作りの響とも、にほひともいふ。しかし匂ひといふは小にして、響はふとし。響の証句

　在所の親が又はきにくる
此頃は昼から〳〵花ぐもり

是ははきに来た婆々等が口上也。ひゞきはずつと延びて一句に行わたるなり。地は人間の平生なり。稽古は此地の事也。是が調はねば俳かいにならず。見よや、「木履」は前句の外の姿にして、「呵られて」等作れる所、彼会釈の附合なり。

　椿の色を奪ふはりもの
節
出がはりもこちの家には伊達過て

「椿の色」に「伊達」と語証せる処、是「節」也。「過て」とい」ゥへるは、例の言便の句作也。においなり。いはゞ有心の附合

四

ともいわんか。

出代りは百人一首（ヒヤクニイシユとよむべし）をも知て居て

「椿」に歌書の体よりおもひよらざる百人一首を出代の知れる処、是「曲」也。「知て居て」といふ処に、『論語』の「奪朱」といへる詞をふくめて、いわゝ面影の付合なるべし。

○「節」と「曲」別に口伝有。発句もまた〳〵響・馨は同じ事也。是は

　草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな　口伝なり。

為弁ニ
公任卿評　西行談笑曰（歌書の秘書也）、大弐高遠は公任卿の弟子なり。卿の病気の時尋給ふ。公家衆とても病気見舞は内証より常のまゝにて見舞ふ所に、高遠は束帯して尋給ふ故に、内外のものも不審に」8おもひける。座敷に通り給へば、公任卿も助られて起上り給ふて挨拶ありけるときに、高遠申されけるは

　逢坂の関の清水に影見えていまや牽らん望月の駒　　貫之
　逢さかの関の岩角ふみならし山立いづる霧はらの駒　　高遠

二首ならべて窺はれけるは、拙者の句は初はことの外面白きやうに覚え候得ども、後ほど面白からず覚え候。貫之のうたはさまでも覚え候はぬが、吟ずる程次第におもしろく覚え申候。いかゞしたる事にて候はんやと也。公任卿聞給ひて、殊の外感心して答給ふは、「貫之の歌はさら〳〵と自然と読出して句作の工みなく、読叶え給ふ也。其中に「月」と言」ゥはずして「影」といふ所にてしぜんと月の顕はれたる処も、自分に工まずして作りたる所ゆへに吟ずる程、感がまし候也。御身の歌は「山立出る霧原」と随申、

耳にてはつきりとなき也。日野中納言資朝卿、東寺の門に雨舎りせられたりけるに、かたわもの共の集り居たるが、手も足もねぢゆがみ、うちかへりていづくも不具にことやうなるを見て、とりぐ〳〵にたぐひなき曲ものなり、花とするに足れりと思ひてまもり給ひける程に、頓て其興尽て見にくゝ、いぶせく覚えければ、唯淳に珍らしからぬ物にはしかずと思ひて帰りて後、此ほど植木を好みてことやうに曲折あるを堀捨てられけるとなり。」ウ

第一心の塩梅を離れ一句の作の塩梅になづむなと言へる事也。

　　椿の色を奪ふはりもの　　といへる脇に

　出代の日に其家の名を附ヶて

一句の姿のあんばいにかゝる故に、前句に背きてわろし。

　出がはりの路地へ木履を叩られて

是、前句の内の情を結びたる句作也。畢竟、趣向の姿に迷はざれと也。姿をおほくいふ時は、情はこもるなり。「あら寒し」「唯寒し」と斗は情なけれども、「あら」といふた処が則両袖を巻たる姿が顕はるゝ也。姿は象物斗にもあらず。言語にも如此。『為弁』に二句の姿の証句、伊勢一夜庵にての行灯の句くはしく有、可考也。」5先師常に曰、「句作は前句の内の情を結ぶ。趣向は前句の外の姿をあんじ」。

○一字一点より付合の姿

走　敵よせくるむら松の音

　有明になし打烏帽子着たりけり

響　夜明の雉は山かふもとか

五む十し何ならはしの春の風

　馨　稲の葉のびの力なき風

　発心の初めに越る鈴鹿山」ウ

○詞を失はず「ことばは古きをもつて先とし、心は新らしきをもつて先とす」と『詠歌大概』に宣ふ如く、俳諧も俗談平話の常を失はざる事なり。

○新古は言語の尽ざる所　むかしより寒いは今も寒し。暑いは今も暑し。それを寒しといふ故に尽ざる也。詞を失なはざる故に尽ぬ也。詞とは俗談平話なり。詞尽なばなんぞ新古あらんや。

　中々に雲より上はいざしらず

　みゆるばかりも高き山かな

山々の高根〳〵を伝ひ来て

　ふじの裾のにかゝる白雲

『五論』に曰、「始は姿情のまゝにいゝ出し、次は姿情の」6理をいふ」。いづれも高き所を言ふなるべし」。

○其言其語　言語の二つをわけたり。文の用なり。

伝曰

○四字　詩歌連俳

○三様　儒仏神

姿の形容を見るには、専ら『荘子』「疱丁」の段をみるべし。余情の取やうは『論語』の「助字」の含やうを可考也。我家の俳諧は上手の医者の薬をもるが如く、下手はいろ〳〵と媚てむづかしく遠き薬をもれども、上手は近きくすりにて済すなり。返す〳〵も我家の俳諧は発句も附句も同じ一字流行也。」ウ

三

其動ずるに善悪あり。其善悪の虚実を塩梅してつけ拵を道理とい丶、己をまげずして背を理屈といふ。○情は天地一体かはらねども、地獄極楽六道人天」2姿にわかる。其分る所に新古有。一字の流行にて新らしいすがたにしたがへば、其情新しくなる也。情に随ふ時は流行の手尓遠波行はれがたきによつて、古風になる也。姿にしたがへば新らしく、情にしたがへば古風なり。

○連歌の姿　禅僧などの観念観相ともいふべし。

○俳諧の姿　酒のみ諷などする姿なり。

○草履と木履　同じ道具也。しかし路道具が違ふ也。聊のちがい也。

我家には姿をもつて先とする故に、たとへ詞は連歌のことばたりとも姿を先とせば構はず、口先ばかりにて情のみの句ならば、譬一句残らず俳の詞たりとも我家にはとらず。古風は口先斗にか丶つて、情は連歌をもつて行ふ故に、少し言葉美しければ、」ゥ「俳がない」といふ。もつともなる事なり。他流には恋の詞と立て情の恋句はなし。詩は恋の詞は閨・妾など丶いふ事あれども、夫もしかとなし。歌に恋を専ら立らる丶は、恋は専ら「実」をいふ物ゆへ、その「実」を顕はして勧善懲悪の為にしたまふ也。連歌には恋のほ句はなし。我家には恋の発句も許し給ふ也。又歌仙一巻の内に恋のなしとてもくるしからぬなり。又情の恋といふ事を立られたり。たとへば

そうじやゆら桃がひとつ多かつた
物さしに狂ふおとこのた丶かれて

是、詞に恋はなけれども恋になるなり。」3

又　もみ裏を着る祖父の養生

二

是にては恋にならぬ也。恋の詞はあれども恋の情なければ、歌仙の表にも此類の句は許すなり。悲しい哉、今余流には専ら恋の句を第一にして、三十六の内半ば恋にて果す。其上、人情等出されぬ詞をも遣ふは残念のこと也。又、田舎辺の点者の評判を見るに、「俳うすし」「俳なし」など丶非書せる事、可笑甚敷也。

○風情はよし　『論語』曰、「温故知新者以可為師」。趣向は有のま丶なる情を尋て、句作は一字流行を貴むべし。風姿はさらに新らしきを考ふべし。

○新古は時の附合　前句の出来ぬ内に作てはおかず、前句の附合にて其附句の変化を知べしと也。」ゥ

○姿はありて情なしといわんも　姿情備はると教れば、はや情が勝ゆへに、趣向は温古証拠、

他門には奇言好ミ、

我家には平話を好ム。

（為弁に）行秋の道々こぼす紅葉哉　乙由

「こぼす」といふ句作にて「行く」といふ所に姿をつけたり。他流にては「行秋の道々」、夫はい丶尽したり。古しと言はん。我家にてはたつた一字の流行にて、是らの所能々可考。此「こぼす」といふ三字の説にて一句の姿の調ふ処を可考と也。連歌にも姿をとる証は『為弁』に有。『白馬文章訓』に曰、「眼をもて前句の姿を見て句作べし。耳を以て前句の情を案ずべからず。耳を」4以て案ずれば、是か夫かと色々に工夫するゆへに聞えぬことも案じ出すなり。眼にみるときは、其見た侭に言ふ故に我も人もがてんが行也。たとへば「鼻」と「花」との如く、眼にてはよく知れども、

美濃派道統系の『俳諧十論』講義録―『俳諧十論弁秘抄』(下)

中森康之
永田英理
(白百合女子大学非常勤講師)

『俳諧十論弁秘抄　坤』

俳諧十論の弁二

姿情論

○言語姿　○○風雅事　口伝別記

○風言雅語　「風」とはよそへ事にして、物によそへて形を顕はす。「雅」は真ッ直にその形をいふ。「風言」はよくよそへて「夫ぞ」といはせたるもの、たとへば大蛇の目を「風」でいふ時は、「百練の鏡に血をそゝぎたるが如き」といふ、是「風」也。「雅」でいふときは、「只すまじい眼」といふ事也。

○占文　うらなひ書也。

○君臣父子　上天子より下人非人に至までも、情に替る事[1]はない。然れども、其貧福により高下にて姿をもち、君臣・父子とわかる、然れば情は姿にしたがふもの也。

○儒書工面　方便也。孔子の大虚も門人の小実より狭くなる也。仏の十大弟子の寛活より仏の大虚は広まるなり。『日本記』等は猶以て姿のたとへ斗にて書けり。鳥の卵といゝ出す、則姿也。又筆とつて向ふ、筆を立て、紙にうつる、則何の字と見ゆる也。書ずして筆を持つ斗にては何の字とは知れがたし。爰を以、姿の先なるを知べし。

○文章の姿　清少納言「あれにぼうたんの花咲て」と、「ぼうたん」の余音にて花を称したる。詠入たるすがたをいへる所を見るべし。

○古池の蛙　おもてに淋しとはいわねども、言外に風情ゥをこめたる処みるべし。詩歌も此姿を表とするなり。「たとへ情を先にするとも、姿を破る事なかれ」と定家の卿のおしへ也。

　道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立どまりけり　西行

　田一枚うへて立さる柳かな　翁

姿[為弁]　一句の姿　二句の姿　三句の姿　口伝別記

○古今一情　人間の七情は元来なけれども、物に動て出るものなり。